

# 水俣病の未認定患者

# 審査をやり直せ



「裁決」を発表する大石環境庁長官

環境庁、県決定を正式に取消す

“疑わしきも認定せよ”

## 公害救済法を広く運用

### 県、差し戻しに衝撃

今月中にも再詰問

いわゆる未認定患者問題について、環境庁から“差し戻し”的裁決を受けた県はショックを受けている。県はこの対応について頭を痛めているが、基本方針として県公害被害者認定審査会(篠原清比古会長)に再詰問することを決めた。県としては審査の段階で疑わしいものは認定しておらずところが、再詰問という形になるとこ

は県が行政的敷衍までも審査会に押しつけることになり、今後の審査会に対する方針を詳細に説

査会の出方が注目される。

環境庁の裁決が“差し戻し”という結果になったことについて、沢田知事は七月、「県としてはこれまで公害被害救済法に忠実に從事してきつまつた。しかし、このような結果になつたことは国に再詰問することを決めた。県としては審査の段階で疑わしいものは認定しておらずところが、再詰問という形になるとこ

は県が行政的敷衍までも審査会に押しつけることになり、今後の審査会に対する方針を詳細に説

明、“疑わしきものも認定する”との前提のもとに審査するよう要望したい」と語った。

県は早急に審査会に対し環境庁の裁決結果を報告し、審査会の納得を得たうえで今月中にも再詰問の方針が変わつたためと思う。このうち方針で審査、認定しておかなければならぬところについては反省している」と述べ、さらに「今後は

容になることが予想される。

一方審査会は環境庁の裁決結果について公式な見解を表明していないが、委員の中には「人造土質化など」とする歓迎派と、必ずしも「疑わしきもの」というかなり行

環境庁は七日、水俣病未認定患者九人について熊本、鹿児島両県が出した公害被害者認定拒否の決定を取り消し、両県に審査をやり直しを命令した。公害被害救済法の精神を最大限に尊重し、疑わしきも認定せよーというのが裁決理由の骨子。大石環境庁長官は同日「未認定患者がすみやかに救済されることを望む」との長官談話で発表するとともに、新しい基準を事務次官連名で全国各県に指示した。

認定指摘取り消しの行政不服審査会さんら九人は、再審査により認定されることを確実である。ま

た現在すでに百人以上のぼつて、病患者にも、この裁決により国にいる熊本、水俣病の認定申請者、不知火海沿岸に多数いる潜在水俣

に立ち遅れていた公害行政の問題的前進である。

同庁は公害被害救済法の法律解釈として①症状の発現または経過

が魚介類に蓄積された有機水銀の絶対量によることを否定出来ない場合も、同法の趣旨に照らし対象とする②症状が公害病指定期間に水俣病の診断によることを否定しない場合も対象とする→を

あげて、以上の二つのどれかに該当する場合は、争がは公害病認定を

する。

すべきだとしている。

これは聽定案として有機水銀と水俣病の因果関係がはつきりしている場合だけでなく、影響がある場合も含める。医学的に疑わしい場合も否定出来ない限り、積極的に認定するという二つの基本的方法の精神を貫いたもので、これまで審査会段階（特に船本県公害被害者認定審査会）でふるい落とされてきた不全型、軽症の水俣病患者を全面的に整済することになる。

今度の環境庁の取り消し決定は、結果として真性水俣病だけを認定してきた船本県審査会（会長、植田勝比古船本大教授）の審査方法をぐつがえし、さらに「水俣病の権威を集めた審査会の結論だ」と審査会のいいなりになつてきた船本、鹿児島両県を上級官房としてきびしく批判することになった。

それとともに長官談話、次官通達で「救済法の運用に関し、船本の被曝、指導に欠けていた」と厚生省、環境庁の行政責任を「自己批判」しており、おぞまきとはいえ被害者救済の本来趣旨にやつと立ち戻つたことは今後の公害行政

にとり新しいスタートといえる。

さんらの長い間の努力が実ったものである。

一、しかし一片の取り消し決済だけでは水俣病すなわち「チツソ瀕海事件」の全貌を解明へのなんらの保証ともなり得ない。したがって次の提案をする。①国は一齊検査の方法をめぐつて国際的なシンポジウムを開け②独立の身分をもつチツソ瀕海被害調査士設置のための特別法をつくれ③チツソ瀕海での損害賠償請求訴訟に對する応訴を中止し、水俣病実態解明のための出庭を取扱よ④公の有志によって一斉検査・追跡調査医師団の結成をよびかける。

(東京支社)

# 問題はむしろ今後に

代理人団  
が声明 環境庁裁決は当然

水俣病被害申請却下に対する

行政不服審査請求事件の代理人団

として監督次のような「声明」を発表した。

七日の裁決、発表後、環境庁内でも記者会見し、取り消し裁決は当然だが、問題はむしろ今後にある

一、法の趣旨を考え、九人の背後によくの「隠れ水俣病患者」が存在する事実を思えば、取り消し裁決はさわめて当然であり、川本

# 新たに6人が請求

行政不服審査請求申請書は違法

水俣市月浦の池田弥平さん(六二)一人として七日「水俣病の認定申請」もせぬまま放棄しているのは違法  
からことし三月にかけて、熊本県知事に「公害被害救済法」に基づく水俣病認定申請を出していた  
が、いまだになんらの処分もなく  
「この長期間の不作為状態は法精神を無視しての放棄状態であり、  
ら六人は後藤孝典弁護士らを代理に對し熊本県知事がなんらの処分である」と大石環境庁長官に行政

不服審査請求を出した。

出せ」と求めている。

請求者は次のとおり。

△水俣市月浦、池田弥平(六二)△

同、田中七大郎(八五)△同、松本ム

ネ(六七)△芦北郡津奈木町福浜、岩

崎満(四七)△水俣市百間町、田中ふ

じの(五九)△同市坂巻岩、山下卯吉

(六〇)

(東京支社)

# まだ除かれぬ不安

代表の川  
本さんら

突破口開かれたが…



川本輝夫さん

行政不服審査請求をしてからち  
ょうど一年、県へ差し戻しの裁決  
が出たが、請求人代表の川本輝夫

さん(ヨセ)は「水俣病に認定せよと

情である。

しかし川本さんらのねらいは従  
来重症患者だけが注目されがち  
だった水俣病の概念そのものを変  
えたかった。再び審査会にかかる  
ことになるだろうが、水俣病患者  
はそんなややこしい形を取らなければ救われないのだろうか」とい  
ふたつは取り除かれていらない表  
明したことになり、川本さんも高  
く評価している。さらに「認定申  
請たってどんどん出ている。こん  
なことはかつてないことだ。しか  
かもまだ水俣病についてはわからな  
いことが多い。行政、医学面でも  
こういう事実を踏まえた対処の方  
をしてほしい」と今後の水俣病  
問題を要望している。なお八日に  
は九人で今後の対策を話し合う。